

甲骨文	金文	小篆書	隸書	楷書	行書	草書

▲図①「書体の変遷」

た形で、手を前に垂らし腰をかがめている姿です。

図③は「大」。「ひと」を正面から見た形で、両手・両足を広げて立っている姿。その姿が普段の姿より大きく見えることから、「おおきい」という意味になったのでしょうか。

「大」の字の上に「●」が付くと「天」(図④)。「●」は「□」や「○」だったりもするのですが、いずれにしても「ひと」の頭部を現しています。「ひと」の頭部を天といたのだそうで、一番高い箇所なので、これがやがて天空の意味になっていきます。

また、「大」の下に「一」が付くと「立」(図⑤)。「一」は場所を示し、人が位置する儀礼の場所の形なのだそうです。イメージ的には、地面に立つ人の姿といったところでしょうか。

図⑥は「子」。頭の大きな赤ちゃんの姿です。

図⑦は「首」。髪の毛のある頭の形です。転じて「くび」を意味するようになりました。

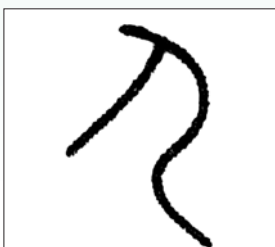
図⑧は「身」。妊娠した女性を横から見た姿です。「みごもる」ところから、「からだ」を指すようになったのだそうです。

いかがでしたか。漢字ってわりと面白いでしょ。ここに紹介したのは、「ひと」の姿や身体の形から生まれた文字のごく一部で、そのなりたちにも諸説があります。

さて、篆刻美術館では「古河市小学生古文書道展」として、毎年12月から3月にかけて、市内の全小学校3年生から6年生によるこうした古い文字を書いた作品展を開催しています。

また、今月25日からは「許我篆書展」として、現代書家による篆書(テーマ「提灯」)の作品を展覧します。漢字に親しみ、漢字への興味を助長するために取り組んでいる古河市独自の事業です。ぜひご観覧ください。

古河歴史博物館学芸員 白井公宏



▲図②「人」



▲図③「大」



▲図④「天」



▲図⑤「立」



▲図⑥「子」



▲図⑦「首」



▲図⑧「身」

※次号(平成28年7月号)は休載します。